

あなただけの
小説
日本史

～玉那覇氏・大城氏 編～

名字・苗字研究

○ はじめに

現代を生きる私たちは、これまで人類が経験してきた様々な災害や戦争や、社会における動乱の中で、一度たりともそこで途絶えることのなかった先人の遺伝子を受け継いでこの世界に誕生しました。

これは、すべての人類にとって当たり前のことのように思え、とりたてて大げさに取り上げるようなことではないと感じられるかもしれませんが、現代社会においてははいよいよ「そうではないかもしれない」と思える事象がたくさん起きているのも事実です。

例えば「少子化」という言葉一つとってみても、私たちの世代には当たり前だった「兄弟姉妹」を知らない子供たちが増えることでもあり、また晩婚化・非婚化によって、“そもそも、こどもが生まれることが当たり前とはいえない”時代がすぐそこまでやって来ていることにも気付かされつつあります。

私たちの子孫、という概念があやふやになりつつある未来においては、家族や氏族単位で見ると、その家系はそこで断絶することでもあり、ひとつの苗字が消えてゆくことでもあります。

そこで、この教科書では、現代に伝えられている氏族のルーツに視点を当てながら、私たちの先祖がこの千年をどのように生きて、現代の私たちがあるのかを明らかにしようとすることにしました。

人類の歴史数千年、数万年には遠く及びませんが、少なくとも私たちの「この苗字やこの名前」がどのように受け継がれて来たかを知ることが意義あるものと考えます。

私たちの先祖の歴史の影には、国家を揺るがす動乱や災害、飢饉や戦争が隠れています。それらの危機に面して、私たちの先祖がどのように生き抜いてきたのか、あるいは自然と文化の恵みを受けて、どのよう

に子孫を育み、日々の生活を豊かなものにしようとしたのかを、ぜひ知ってほしいと願います。

きっと、この歴史を学ぶことで明日からの私たちの生活に対する気持ちが新たになり、また生きる力への糧となると信じています。

この教科書は、一つもしくは複数の氏族の歴史について、特に苗字・名字の成り立ちに注目しながら、古代から現代までの通史をまとめたものです。

本来、個人の先祖やルーツを特定することは、膨大な時間と手間がかかり、ひとつひとつの資料の検証作業は容易いものではありません。専門的には、明治初期にまで個人の戸籍で遡った情報と、地域に伝わる同じ苗字・名字の人物についての情報を精査しながら氏族の動向を検討し結びつけてゆくものであり、少なくとも数ヶ月から数年間を要する作業になります。

そうした「家系調査・家系図作成」を得意とする専門業者も存在しますが、彼らはまず行政書士などの資格を生かして依頼者の戸籍を代理取得し、現地の同族の方への聞き取り、寺院での調査、墓石調査、図書館での資料調査などを積み上げて家系を明らかにしてゆきます。

そこまで完璧に実施するには、当然数十万円から百万円を超えるような実働費用が発生するため、この教科書作成においては、依頼者の住所や本籍地、聞き取り調査から推定できる、最も近い氏族もしくは最も可能性が高いと思われる氏族の歴史と結びつける作業を行っています。

ひとつの推定・仮説としてお楽しみください。

【第一章】 古代の国家形成

〔1〕 神話の時代

わが国を形成する日本列島が大陸から切り離されたのは、現代から約1万年ほど前だと考えられている。同じ頃、大陸からナウマンゾウなどの動物を追って、日本人の祖先と考えられる人たちが海を渡ってきた。

彼らは石を割って作った道具を用いる「旧石器文化」を持ち、列島の気候が徐々に温暖化するに従って、土を焼いて作る「土器」などの使用がはじまり、「縄文文化」「弥生文化」へと発展していった。

そうした原始日本の姿は、発掘によって明らかにされているものの、当時の様子を記した文字における記録は残っていないため、実際の文化の様子においては不明な点がたくさんあるといえよう。

一方、文字記録においてわが国の様子を伺える資料は、712年(和銅5年)に編纂された「古事記」と、720年(養老4年)に完成した日本の正史(正式な歴史書)である「日本書紀」が最も古く、8世紀のものということになる。つまり、2000年を超える西暦の観点では、最初の約700年間については記録があまりなく、わが国の歴史として判明するものは残りの1300年間についてである、ということになるのである。

しかし、その「古事記・日本書紀」に記述されたわが国の歴史の草創記は、「神話」として描かれており、とうてい当時の社会・政治状況をありのままに著述されたものとは思えない。ところが、特に明治以降太平洋戦争の敗戦まで、日本を「神々の創った国」として信仰する姿勢が政府から奨励され、これが「神国日本は不敗である」といった、合理的でない社会の雰囲気を生んでいった面もあるといえよう。

私たちが神国日本の民であり、そして神々の子孫であるとして皇室を中心とした文化を形成してきたことには、もちろんそうなるべき理由がある。そこで、まず最初に、神話の世界に目を向けながら、現代の私たちに繋がる先祖の姿を考察してみたい。

日本神話には八百万(やおよろず)とされるたくさんの神々が存在するが、太陽神である「天照大神(あまてらすおおみかみ)」を日本民族の総氏神として祭り、またこの神の子孫が現代につながる天皇の一族であるとしている。

日本列島を作ったのはイザナギとイザナミという夫婦神であり、ここから日本の歴史が始まるが、天照大神はこの夫婦の娘であり、天照大神の孫である「ニニギ」という神が天上の世界から、「葦原中国(あしはらのなかつくに)」と呼ばれたこの日本に降り立ったことで、日本の歴史が始まるのである。(もちろん、神話の世界では、であるが)

イザナギ・イザナミと天照大神、そしてニニギという直系の繋がりが、そのまま現在の皇室へと繋がる物語を有しているところが、日本という国が世界の国々と比べて大きく違っているところであり、例えば他の国々では王朝が変わる度に異なる民族や異なる氏族が支配者となっているのに対して、わが国の歴史は「万世一系」とされる皇室が表向きは政治の中心に存在することは大変に珍しい。

そしてこの考え方は、皇室のみならず一般の氏族においても多少似通ったところがあり、現在は平々凡々な暮らしをしている市井の人々も、実は皇室や神々に繋がるという伝承を持っている。戦後のGHQの支配の際、そうした視点はことごとく排除されたので、現代の若い人たちはそうした考え方を持たないことが多いが、旧家などでは脈々とそうした伝承が受け継がれていることもある。

[2] アマテラス・ニニギと天児屋命

天照大神(アマテラス)について、最も良く知られた昔話があるとすれば、それは「天の岩戸」にまつわるものであろう。

その昔、アマテラスが、弟の神である「スサノオ」が暴れるのに怒り、天の岩戸に隠れてしまったので、日の光が全く無くなり、世界が真っ暗になってしまった、というものである。

もちろん、世界がそのままでは困るので、慌てた神々は岩戸の前でドンちゃん騒ぎを起して楽しそうに振る舞い、「いったい何が起こっているのか」と不思議がってアマテラスが扉を少し開けたのをチャンスに引っ張り出した、ということになっているのだが、この神話の細部に着目してみよう。

アマテラスが岩戸に隠れている際、岩戸の外ではアメノウズメという女神が全裸で舞い踊り、平たく言えばストリップショーを行うことで、神々は大いに湧き、笑い声が響いたとされている。

不思議に思ったアマテラスは、「どうして太陽である私が隠れて世界は暗闇のはずなのに、アメノウズメは踊っているようだし、他の神々も楽しんでるのか」と尋ねるのだが、神々は「あなたより尊い神が現れたのです」と答えた。

そこで、アマテラスが少しでも扉を開けたところ、天児屋命(あめのこやねのみこと)と太玉命が鏡を差し出し、「ほらこのとおり尊い神がおられます」とアマテラスの姿を映して見せたことで、扉を引き開けるチャンスが生まれた、とされている。

この天児屋命(あめのこやねのみこと)が、藤原氏のもっとも初期の祖先、ということになる。

この神は、アマテラスから繋がるニニギの子孫ではなく、ニニギが天

からわが国に降りてきた際に、随伴した記録があるため、古代天皇家における重要な家臣であつたろうと解釈することができる。

古事記によれば、「天兒屋命は中臣連(なかとみのむらじ)の祖となつた」と記載されており、この中臣氏からのちに、日本の重大事件の中心となる人物が登場することになるのである。

〔3〕 大化の改新と中臣氏

古事記・日本書紀における神話は、実際には初期朝廷における政治の様子を神々に見立てて著述したものと考えられ、その意味では初期皇室に付き従っていた中臣氏は中心的豪族であつたと考えることができる。

中臣氏は、京都市山科区の中臣地区を拠点としており、朝廷においては忌部氏とともに祭祀を司つた。ここでいう祭祀とは、当然のことながら日本神話を基盤にした宗教行事であり、今で言うところの「神道」様式の祭祀であつたと思われるが、この神道を中心とした政治体系は、ある時大きな危機に直面することになる。

それが6世紀半ばに百済経由で伝来した「仏教」であり、欽明天皇が物部氏と蘇我氏を重用し、仏教を受け入れたことで中臣氏と忌部氏の立場は微妙なものとなつていった。

また、欽明天皇の後を受け継いだ推古天皇は、聖徳太子として知られる厩戸王や蘇我馬子らを重用し、仏教を中心とした政治体制はいつそう強固なものとなつてゆく。

文化面では百済に遣隋使を送つたり、多くの大陸文化を受容する発展があつたものの、国内の勢力の中にはそうした気風を好ましく思わな

いものもたくさんおり、少しずつ内紛の機運が高まっていったと考えられる。そして、蘇我馬子が子の蝦夷(えみし)を大臣にし、馬子の孫である入鹿(いるか)が聖徳太子の子である山背王を斑鳩宮で襲撃させたことが引き金となって「反蘇我」の考え方を持つ者が朝廷内に生まれることになった。

ちなみに、山背王襲撃には多数の皇室関係者や豪族が関係しており、朝廷内部で皇位継承をめぐる派閥形成と対立が強くなっていたことが伺える。その中でも、大陸派・仏教派の急先鋒としての象徴が蘇我一族であり、これは逆の見方をすれば、皇室の力の弱体化を意味していたと考えることもできよう。

そして、日本の歴史において最初のクーデターとなる、645年の「大化の改新」こと、中大兄皇子と中臣鎌足らによる蘇我蝦夷・入鹿親子の暗殺が実行されることになるのであった。

この政変の中心人物は中臣鎌足であり、皇室の権力が弱まり豪族達の発言権が増している現状を本来の姿に引き戻そうと皇族たちの間を駆け回って仲間を募った形跡がある。

鎌足は蹴鞠の会の折に、中大兄皇子と接触し、以後秘密裏にクーデターの仲間を探すことに成功する。

645年6月12日、飛鳥板蓋宮において蘇我氏の暗殺に成功すると、孝徳天皇を立てて新政権を樹立し、中大兄皇子は皇太子のまま実権を掌握するようになった。

中臣鎌足が実務者として改革に当たったのは、わが国を唐の律令をモデルとして規範ある国家体制へと改めた点である。公地公民・班田収受・租庸調といった税制の設立など、その後の基盤となる制度設計を行い、またそれを実施していった点では、中臣鎌足の業績は大きい。

中大兄皇子が天智天皇となり、鎌足の死去の前日にその功績をたたえて「藤原」姓を贈ったことが、以後連綿と続く藤原氏族の原点である。

【第二章】 律令国家の変化

〔1〕 藤原氏の台頭と貴族の時代

大化の改新以後、飛鳥時代から続く平城京時代(奈良時代)、平安京時代(平安時代)において、絶大な権力を誇ったのが藤原氏である。

不比等以降、藤原光明子(光明皇后)は始めて皇室以外から嫁いだ天皇の妻となり、それを支えた藤原四兄弟は、のちの「藤原南家」「藤原北家」「藤原式家」「藤原京家」の四家の祖となった。

平安時代になると、四家のうち「北家」が強くなり、その中から平安時代最も権力を持った藤原道長が輩出することになる。道長は「摂政・関白」という役職を通じて貴族が皇室を暗に支配する体制を確立し、摂関政治と呼ばれる。また、藤原氏の子女を皇室に嫁がせることを繰り返して親戚関係になり、血族の上でも権力の上でも天皇家と密接な結びつきを生み出すようになっていった。

「源氏物語」は道長がモデルであるとされ、また紫式部は天皇と自分の娘の間に孫が生まれたことを道長が飛び上がって喜ぶ様子を記録している。

〔2〕 武士の出現と源氏・平氏

律令国家においては、ひとつは皇族・貴族が永遠に増え続けるという問題があり、皇室と朝廷をいかに維持してゆくかが徐々に問題となるようになっていった。

そこで、平安時代頃から、数多く生まれ続ける天皇の「皇位継承権」を持つ子供たち、孫達をいち早く皇室から切り離して、皇室を維持する負担を少なくする方法が考え出された。

それが「臣籍降下」という処遇であり、簡単に言えば、「皇位継承権のないものから早く皇室を離脱させて家臣とする」処分である。
(現代の皇室の宮家創生と考え方は同じである)

歴代の天皇のうち、一世王・二世王(皇太子以外の直系の子と孫)については「源(みなもと)」という苗字を与えて家臣とし、三世王(ひ孫)には「平(たいら)」姓を与えた。

これが後に源氏・平氏といった武士集団が生まれる原因となるわけである。皇室からの給付がなくなり、自力で収入を得て、領地等を運営せざるを得なかったのだ。

また、律令国家においては、京都・平安京を中心として、日本全土の各地方に官僚を派遣して監督する必要があった。彼らは「国司」と呼ばれ、中央の貴族が実際に任官したり、代理者を送り込んで任務についた。

ところが、実際に農作物や特産物を生産しているのは地方に住む庶民であったり、その中で力をつけた豪族であったりしたので、中央から派遣された官僚たちはそうした地元の人々との関係をいかに築いていくかが重要な課題になってゆく。中には、豪族の側から官僚の官位やネームバリューに擦り寄ってゆくものもあったり、逆に中央からの官僚がいつまでも地方豪族に相手にされない、といった小さなトラブルや争いなどが繰り返されるようになっていった。

[3] 南西諸島「奄美・沖縄」の古代史と本州との関わり

さて、神話の時代から奈良・平安時代まで、皇室を巡る物語を中心としながら発展してきた「本州史」とは別に、奄美から沖縄を含んだ南西諸島の歴史を振り返ってみよう。

まず古代史においては、本州から見た「縄文・弥生・古墳時代」において南西諸島は「交易を行う相手」として捉えられていた。しかし、このことは、本州から見て奄美や沖縄の人達が「国外である」という認識であったことはさておき、「本州人と奄美、沖縄人は別の民族である」ということを意味しない。

特に琉球人が別の民族なのかどうかについては、研究上の議題になることは多いが、結果的には、本州の民族と、沖縄の民族には差異がないことが明らかになっており、また後述するが、伝承や物語の上でも、この両者は深い繋がりを示している。

もちろん、沖縄には本州とは別の天孫神話があり、「天の最高神が夫婦の神を沖縄に遣わした」という物語がある。宮古島にも別の創造神話があり、これらは必ずしも本州の神話と同一ではない、という特長もある。

奈良時代になると、本州側の記録などに、多くの南西諸島の人々の様子が現れるようになる。聖徳太子の頃、推古天皇の時代には「掖玖(やく)く」の人々が30人ばかり本州に移住したとあり、これは屋久島を示すと考えられている。斉明天皇の時代には「海見嶋(あまみしま)」、天武天皇の時代には「多禰(たね)島」などが記録されている。

中国の史書においては「隋書」などに「流求」といった語が登場するが、現在の台湾を含めて同じ領域と認識されていたという。

〔4〕 源平伝承と「奄美・沖縄」の人々

南西諸島の人たちのルーツが、実際にどこにあるのかという問題については、まだ未解明のことも多いが、DNA の上では南西諸島の人々と九州以北の本州人は「共通の祖先を持つ」ことが判明した。

遺伝子の研究からは「中国や大陸由来の DNA より、本州人との DNA のほうがはるかに近い」ことがわかっており、むしろ父系で特定の遺伝子を持っているのが「本州人、沖縄人、アイヌ民族」だけという特長もあるほどである。

こうしたことから考古学的には、10世紀前後に、九州を經由して本州人が南西諸島に移動した可能性が高いことが示され、それ以前に南西諸島に住んでいたもっと古い時代からの大陸からの移動者と混住、混血が進んだのではないかと考えられている。

それを裏付けるように、沖縄本島では、一時期「琉球王国」として「日本」とは明らかに別の国家であったにも関わらず、初代琉球国王の「舜天」は「源為朝」の子孫である、と正式な歴史書に残している。

また、種子島・奄美・宮古八重山列島では「平家の落人」が渡来したという伝承を多数伝えており、特に奄美では「平資盛・平有盛・平行盛」らの親族郎党がやってきたという伝説がある。

これらの人々が実際に天皇家から分れ出た「源氏・平氏」であったかどうかはともかく、本州側から一定の集団が南西諸島に移住し、現地の人たちと融合しながら、現代へと繋がっていったことは一定の事実であろうと思われる。あるいは一定の武力などがなければ、のちに支配権を確立できないだろうことも考え合わせれば、彼らは武士であったと考えても全く不自然ではないだろう。

【第三章】 武家社会の到来

〔1〕 土地私有化と領主の出現

律令国家で実施された班田収受(すべての人に田畑を与えて耕作させる共産主義のような考え方)においては、飢饉や不作のおりに租税が払えずに耕作放棄して逃げ出す人民が後を立たず、計画経済がうまく立ち行かない、といった問題も生じるようになっていた。

そこで、早くも奈良時代の天平15年には「墾田永年私財法」が実施され、田畑の私有を認めて資本主義経済に似た形で耕作量が増えるように配慮することになった。これが「荘園」という形で、地方豪族や寺社などが権力と経済力を持つようになる背景となったのである。

こうした複合的原因が組み合わさった結果、地方地方には「広い領地と、農地から上がる高い経済力」を持った地方豪族的集団がいくつも現れることになり、彼らが自衛のために武装することで「武士」という身分が生じることになったのである。

当然、地方にこうした権力が生じると、中央においてもそれらを制圧するために、本来は皇族や貴族だったものの中で武装して鎮圧する部隊が生まれることになる。

これが、日本中が武士だらけになり、引いては武士が政治の実権を握るようになる最初の引き金となった理由であった。

〔2〕 鎌倉幕府の成立

平安時代も後半になると、皇族間の勢力争いや権力誇示において、

武士化した貴族をいかに利用するか、ということが重要になっていった。

白河上皇が創設した「親衛隊」部隊である「北面の武士」は院御所の北の部屋に詰め所を持ち、武力上の権力を有するようになってゆく。

その北面の武士出身で、武士界で頭角を現すようになっていったのが「平氏」である。

平氏が各地の紛争やトラブルに武力を持って制圧するようになると、院制期の朝廷は次第に平氏の言いなりにならざるを得なくなり、平安時代末期にはすでに貴族政治は崩壊し、武士政権の萌芽が見られるようになっていった。

平清盛の代にあっては、平家は全国で500以上の個人領土(荘園)を持ち、いよいよ逆らう者なく「平家にあらずば人にあらず」とまで言われるほどになっていった。(平家とは平氏のうち清盛らの家系を意味する)

ところが、権力を持ちすぎた平氏がクーデターを起して、清盛の娘の子である「安徳天皇」を皇位につけようと画策しはじめると、いよいよ反平氏側の勢力はおなじ武家である「源氏」を利用して平家追討の反撃を始めるのであった。

この間、平安貴族本流の藤原氏は実権を失っており、むしろ地方の官僚として各地に下っていった子孫達が、それぞれの地で武装化し、小さな武士として限られたエリアを支配するようになっていくくらいであった。

ところが、源平の合戦に決着が付き、いよいよ源頼朝が「征夷大將軍」として関東地方鎌倉に拠点を置いて「鎌倉幕府」を立てると、特に関東地方の武士たちは率先して頼朝を支持し、その傘下に入るようになっていったのである。

〔3〕 琉球王と源氏伝説

琉球の歴史がはっきりしてくるのは、冊封関係にあった中国の「明」が「琉求」として認めた14世紀(本州では鎌倉時代)以降である。ちょうどその頃本島に起こった「北山・中山・南山」の「三山時代」からが琉球王国の前史となった。

三山を統一したのは中山王となった尚氏の家系であるが、この一族は「大城氏」と深い関係にあるが、大城氏については次章で取り上げるとして、まずは琉球王となる尚氏について説明しておこう。

尚氏が琉球王国最初の統一王朝を作り上げたのは1429年、本州での室町時代に相当するが、本島南部の佐敷という地域の按司(地方豪族)の出身であった。

この尚氏を「第一尚氏」と呼ぶが、その出自ははっきりしていない。一部に肥後国(熊本県)八代を本拠とした名和氏が水軍として活動した結果、沖縄にまで渡り、肥後国八代に近い「肥後佐敷」にちなんで地名を「佐敷」とした、という説があるが、考古学的にはあまり認められていないという。

それに対して、廃藩置県まで琉球王となった「第二尚氏」の系統は、その公的な歴史書でも「源為朝」の子孫を称している。第二尚氏は第一尚氏の王の家臣だった金丸という人物が王位に就き、「尚」の氏を称したもののだが、保元の乱で流罪となった源為朝の子孫である「舜天」に連なるとしている。

実際に一族の墓をDNA鑑定した結果では、「中国から東南アジアにかけての遺伝子」とともに「中世の本州日本人の遺伝子」が得られたという。

【第四章】 戦国動乱の時代

〔1〕 鎌倉幕府の崩壊と元寇

源頼朝の政治体制は「御恩と奉公」と呼ばれる明確な恩賞システムにあった。簡単に説明すれば、鎌倉幕府と源氏に忠誠を尽くせば、土地・領地という褒美を与えてもらうことができ、戦争において勝利が増え貢献度が増えれば、与えられる領地も増える、というわかり易い制度である。

しかし、この制度は、裏を返せば敵であるどこかの土地の集団に勝てばその土地を奪って味方に褒美として与えるものであったため、各地の豪族や小領主たちは常に領土拡大のために戦わなくてはならない、という呪縛を受けることになってしまった。

これが、戦国時代という未曾有の動乱の時代が生まれる原因となった主要な理由である。

また、鎌倉時代中期1274年と1281年に起きたモンゴルからの侵攻である「元寇」が起きたことで、この武士体制の本質的矛盾は明らかになってしまう。

鎌倉幕府は、挙国団結して、日本中の武士団を九州に送り込み、元軍に対抗し多大な被害を出しながら追い返すことに成功したものの、この戦いでは領地を得ることが全くできなかったため、各地の武士団との「御恩と奉公」の関係が一挙に崩れることになったのだった。

こうして、各地の武士団は、それぞれ隣国との領土争いや、自分たちだけの実力を頼んで一層の武装化を強め、また領民達も戦時には武装化して戦うことで、支配層も庶民層も武士化するという時代に突入する

ことになったのである。

〔2〕 下克上と戦国武将

鎌倉幕府においては、各地の支配は「守護・地頭」という官職を置いて中央から官僚を派遣して行っていたが、地域の豪族や有力者が武装化する中で、中央から派遣された「守護・地頭」の力を凌ぎ、支配に従わない者が増え始めた。これを本来の「下克上」の風潮と呼ぶ。

この旧来の支配システムを否定するところからはじまり、引いてはのちの豊臣秀吉のように、農民から武将となり、関白にまでのし上がるような雰囲気蔓延したのも事実であり、戦国期は各自の実力主義が最も高まったと言えよう。

この頃、自分達の支配地域は自分達で守る、という概念が強くなり、同じ藤原氏でも住んでいる土地にちなんで別の苗字をつけたり、あるいは官職に由来した独自の名字をつけるようになってゆく。

これは、もともと荘園において独自の支配地域を「名・名田(みょう・みょうでん)」と呼んだことにちなんでいる。たとえば、平良文という武士は、相模村岡に領地を持っており、5男だったため「村岡五郎」を称した。これがのちの苗字につながり、本姓平良文村岡五郎という呼び名などが残ることになった。

〔3〕 交易による発展とグスク時代

本州から見て「平安時代、鎌倉時代」頃は、奄美諸島は日宗貿易の中継地点として発展していった。

この時代は、日本側、大陸側の両方の立場と関わりながらの動きが

見られ、また必ずしも資料が多くないため、詳細がわからない部分もある。

たとえば喜界島は、平安時代には福岡県の「大宰府」の出先機関であったようだ。ところが奄美大島は朝廷側には属さず、「南蛮人」として他国のように捉えられていた。

一時期、大宰府が税などの徴収を多くした結果、「南蛮人(奄美人)」が反乱したため、それを征圧するように「喜界島」に命令した記録が残っている。

しかし基本的には、大宰府と高麗あるいは中国の「宗」とを結ぶ外交の中継地として、奄美地方はそれまでの貝塚文化(土器社会)から物心ともに変化していったものと思われる。

さて、本州における鎌倉、室町時代(12世紀以降)は、琉球王国における「グスク」を主とした「グスク時代」と呼ばれている。

それまで狩猟採集的傾向が強かった「土器」や「貝塚」が出土することが多かったのに対して、「陶磁器、鉄器」などが現れて、農耕と武器が発展したことを示しており、特に各地に「城(グスク)」が作られたことから南西諸島が「王国」の成立へと展開してゆく基盤ができていったと考えられている。

グスクは城塞であると同時に、宗教的な拝所や集落としても機能しており、その集団の中で権力を持つ者が現れると「按司」と呼ばれた。諸侯・豪族のようなものである。

こうした按司たちの中から特に沖縄本島では王統が生まれ、14世紀以降三つの権力が並んだ「三山時代」を経て、統一され「琉球王国」が生まれた。

1609年に薩摩藩が琉球に侵攻し、本州側のシステムである、「幕藩体制」下に置かれるようになった。

〔4〕 大城按司と「大城氏」のルーツ

沖縄県内には9000軒もの大城姓があり、南城市大里大城の地名から起こったと考えられている。

この大城の地は「大城城」があり、大城按司というグスク時代の地方豪族が拠点としたエリアであった。

大城按司の父は「玉城按司」で、琉球を創造した神・アマミキヨが築いた「玉城城」の城主はその子孫とされている。

その息子の大城按司は、のちに島添大里按司(大里城主)との戦いに敗れたが、大城按司の娘が鮫川大主という人物と結婚して子をもうけ、その子が「尚巴志」となり、ついに琉球を統一して第一尚氏の王となったという。

さて、南城市玉城の奥武島には、「玉城按司兼松金」の墓所があるが、実は玉城城が落城したのち、子孫は奥武島に渡った。江戸時代の享保年間に「奥武島の大城氏が新田開発をした」とあり、このエリアの大城氏はその子孫と考えられる。

大城按司の父である「玉城按司」の子孫も奥武島に逃れていることが確認できることから、この島の人たちは玉城・大城按司の直系の子孫である確率は非常に高いのではないだろうか。

余談ながら「奥武島」は沖縄県内に複数あり、本来は死者を吊った「おうしま」と呼ばれる葬送の島だったようだ。そうした島々がグスク時代の戦乱を経て、移住が増え、開発がなされていったのではないかと思われる。

【第五章】 江戸幕藩体制の成立

〔1〕 天下統一と江戸時代のはじまり

戦国時代が進むにつれ、各地に根ざしていた小武士団は次第に大きな組織へと集約されてゆく。中部には織田・徳川が控え、最後まで彼らと対立した武田・北条・上杉・佐竹などの諸家が関東地方を纏め上げていった。

この頃までは、武士と農民に明確な線引きはなく、その領地に根ざすものはいずれも武装して他地域と戦ったのが実態である。ところが、戦国時代も末期になると、専門家としての武士と、人海戦術として使われる足軽(平時は農民・ただし武装できる)との職業観の違いが明確になっていった。

その差を決定づけたのが天下統一した豊臣秀吉の「検地・刀狩」であり、この時点で武装農民の武装解除がなされ、村から兵器が徐々に失われてゆくことになった。

日本各地の氏族も、その時に従っていた主君の状況によって、いずれかの藩に属する武士として江戸幕府の体制に組み込まれてゆくか、あるいは自分達の土地に根付いて農民として過ごして行くかに分かれることになった。

江戸幕府においては「士農工商」とイメージされるような階級制度を設け、それぞれの身分が争わぬよう、支配しやすい状態に教化していったのだが、本来の氏族のルーツで考えれば、「農家となった氏族」も「武士となった氏族」も、同じ先祖を持つ子孫に過ぎない。しかし、そうしたことを思わせない、考えさせないところが、江戸時代の農民支配の成功したところであり、封建社会において上位の者が下位の者を支配するには

大変に都合がよいシステムを生み出したと言わざるを得ない。

現実問題としては、おなじ農民となった氏族同士であっても、土地を持っているかどうかが大きな違いとなった。

土地を持っているということは、検地刀狩りの直前までは「領地を持った戦国武将であった」ということを意味し、彼らは小作者に対して、一定の支配権を持っていた。

江戸時代においては、土地を持つ農民は庄屋層として、藩政に組み込まれていった場合が多いのはそのためであり、元は戦国領主の末裔である証である。

この土地を持つものと持たぬもの(小作人)の関係は、のちのちまでわが国の国家形成に大きな影を残すことになる。これはたとえば以下のような例を考えて見れば明白である。

例えば、ある戦国武将の末裔である一家が、江戸時代には農家を経営していたとする。その子らが生まれた時に、分割して相続させれば田畑はどんどん面積が小さくなり、いずれは生活が成り立たなくなることは自明である。

(そのため、そうした愚かな行為は「タワケ(田分け)」と呼ばれた)

するとその家の子供たちは新田開発をして新領主となるか、あるいは小作化して土地をもたない農民になるか、あるいは別の土地に移動せざるを得ない。

このシステムは、昭和に至るまで各地の農村に残っており、「長男が田畑や家屋敷を継ぎ、次男以降は外へ出される」という遺産分配の方法を生むことになったのである。

[2] 琉球における「士(さむらい)の身分」 ～玉那覇氏のルーツ～

薩摩藩主であった島津氏は、鎌倉時代に中央からやってきてそのまま長年、支配者の座に居続けた稀有な家柄である。当初は鎌倉幕府から派遣された島津荘の荘園管理者であったが、薩摩・大隅・日向などの守護職を得て発展し、周辺の氏族をことごとく破って家臣としていった。

そのため、薩摩藩に属する武士は、そのルーツをたどれば全国各地、九州各地に由来することが多い。代表的な西郷隆盛は、熊本の菊池氏(もと藤原氏)の出である。

それに対して琉球の位階は名目上の「琉球王府」の序列に従っているため本州の士分とは多少違いがある。

まず国王一族がおり、「王子・按司」が親族とされた。この場合の按司は中世の地方豪族とは異なり、「王室の分家」を意味する。

それから上級士族として「親方」身分があり、彼らは地頭として各地を支配した。その次に中級士族の「親雲上」、一般士族に当たる「里之子親雲上」「筑登之親雲上」などがある。

沖縄の士族と本州士族の大きな違いは「子供が親の領地や身分をそのまま受け継ぐのではない」という点であろう。(王族)按司の子であっても、嗣子以外は按司を名乗れなかったり、親方身分も世襲ではなかったようだ。

さて、玉那覇氏のルーツは、いくつかの系統があり、すべてが同じ血統というわけではない。苗字としての玉那覇は名島尻方南風原間切の玉那覇という地名に由来する。古い地名表記では「玉那波」であったようだ。方言ではタンナハまたはタンナファという。

「由来記」によると、この地には「玉那覇ノロ」と呼ばれる女性祭司がおり、「玉那覇ノロ火の神・里主之殿」があったとされている。

沖縄における「ノロ」は琉球神道における女性の神官で、民間の巫女である「ユタ」とは異なり、公的に認められた「神主」に近い存在であった。

本州で言うところの神道の神官が、朝廷や権力と結びついたように、沖縄ではノロは王府より任命されており、有力な按司の家族から出た。

ある史料では「真呉勢は津嘉山の玉那覇村の大屋子(村役人)に嫁ぎ、玉那覇ノロとなった」などの伝承がある。(あるいは真呉勢の異母姉妹である真鍋が玉那覇ノロとなったという説もある)

玉那覇村における玉那覇氏の祖は玉那覇大屋子であったが、明治初年にはそれ以外に10ほどの「玉那覇を名乗る家柄」があったようだ。

それらの氏族の中で、赤田村下川を本拠として大筑(警察署長に当たたる)を務めた玉那覇筑登之親雲上の三男の家系で、初代「玉那覇にや」という人物の家系があった。

この子孫は「筑佐事(刑事・警察に相当)」を努め、大筑の元で職務を務めたという。

(「元祖之由来記 玉那覇家」という家譜が現存している)

この玉那覇氏の家譜では、一世が「かま」という女性になっており、玉那覇氏はその子「にや」という人物から始まっているが、「歴史・伝説にみる沖縄女性」(2005・比嘉朝進)という書籍に以下の話が掲載されている。

『王朝時代は、島から首里・那覇へ移住することは(嫁入りでも)禁じられていた。那覇の玉那覇は久米島のカマと結婚して那覇に連れて帰り、子も生まれた。が、二十年後後に発覚してカマは強制的に帰され、玉那覇は寺入り四十日の処罰となった』

これによると玉那覇が結婚したのは久米島の娘である「かま」で、それは公式に認められたものではなかったため、この系譜の一世が「かま」となっている可能性があるだろう。

○ 琉球王朝の立ち位置 ～薩摩藩の支配～

琉球王朝は本州でいう室町時代から明治時代まで存在したが、鹿児島藩の薩摩藩が琉球に侵攻したのは慶長14年の江戸時代初期であった。

それ以降、琉球王国は薩摩藩の従属国とされ、中国の「明」とその後起こった「清」との両方に属した形となった。

経済的には、中国と薩摩藩の間の交易ルートを確保したことで中継貿易で潤ったが、一般民衆には土地所有を認めなかったことと農業生産性が低い土地柄であったことから、民衆は困窮したという。

薩摩支配の間にはサトウキビからの黒糖生産が確立されたり、空手のルーツとなった「唐手」なども生まれたが、幕末になるとペリー来航に伴う開国政策により、中継貿易のメリットが徐々に失われることになった。実はペリーは江戸幕府より先に琉球王府に來訪しており、武力開国も考えていたというが、アメリカでの南北戦争のせいで、日本や琉球への関心が薄れていったという裏事情があった。

【第六章】 明治維新と近代国家

〔1〕 土地による国づくりから経済による国づくりへ

江戸時代は260年も続いたが、この間氏族の地域的な移動や、身分的な移動は厳格に制限され、コントロールされたため、戦国時代の末期に定着した身分や居住地は、大きく変わることなく幕末を迎えることになった。

しかし、武士においても農民においても、明治維新による大日本帝国の誕生へ至る制度変更は大きな負担を強くものとなる。

そもそも誤解をされていることが多いのだが、江戸時代の武士達は農民を絞り上げて年貢を取り立てた、というのは少し構造的に話が間違っている。

先に「土地を持っている農民」と「持っていない農民」について説明したが、武士達は本来「土地を持っていない農民」と直接関わることはなかったのである。

この考え方は以下のようなものである。土地持ちの農民は本来、戦国武将の末裔である。従って庄屋層としてその土地で一定の権限も有している。戦国期の領主と、新しい江戸期の領主が、収穫された作物を分配するという作業が「五公五民」や「四公六民」といった配分であり、土地を持っている農民が収穫量や収穫率を上げるために、単なる労働者（小作人）である水呑み百姓を酷使する、というのが実態に近い考え方である。

つまり、いつの時代も請負労働者や、末端の派遣社員のような弱い立場のものが搾取の対象になるという構図は変わらないのである。

ところが、江戸時代を通じて米中心の経済は破綻し、文化が発展するにつれ金貨や銀貨などを通じた貨幣経済へと変容するようになった。

江戸幕府の会計が立ち行かず、同時に諸外国からの軍事的圧力を受けるようになり、幕末から明治維新にかけてはとにかく「お金が根本的に足りない」という状況がわが国全体に蔓延したことになる。

諸外国を追い払おうとする攘夷運動においても、倒幕を考える志士たちにおいても、どの立場でも軍事的に経費がかかり、かつ諸外国に立ち向かうためにまた異なる外国から兵器などを輸入することを繰り返すことは、本質的な矛盾を生み、かつ外貨の不足を招いた。

〔2〕 明治新政府とは何だったのか

こうして、政治的な考えや理念は全く別にして、借金してでも密貿易してでも武力を購入することに成功した新政府軍は、倒幕を果たし今度は大きな債務を解消することを考え始める。

武士にとっての大転換は、武士という身分の剥奪であり、それまで恒久的に保証されてきた賃金の支払いを「金録公債証書」という債権に返還して帳消しにされたことが挙げられよう。

これは、武士の身分を失うのと引き換えに、一時金もしくは年金形式でいくばくかの金銭を支払う確約をしたもので、多くの下級武士は日常に必要な現金を得るべく証書を換金して売り飛ばしてしまい、その後の困窮を見ることになる。

一方土地を有していた武士や、農民に対しては、「地租改正」を実施し、米という物納から「現金で納める」形式に変え、安定した税収を確保できるように改革したのである。

こうした制度改革により、すべての氏族は「武士であっても、農民であっても」どの身分においてもそれまでの歴史的に享受していた特権を剥奪され、逆にそれと同時に全ての身分が平等である、という「四民平等」の身分差別の解消がもたらされることになったのである。

これらの一連の改革は、神話の時代から続いた「その土地に根ざす氏族や民族の伝統的価値」を現金化し、新政府が効率よく収集するための制度改革だと見ることもやぶさかではない。
(もちろん、旧来の歴史において資金力・現金力を有していた者達は、貴族院議員や旧華族などの形で権力を温存することができた。しかしそれらの身分を得られる者はごく少数であり、かつ彼らが経済社会で現金を生み続ける商才に恵まれなかった場合は、これまた多くの有力氏族が没落することになるのであった)

○ 奄美の音楽は沖縄とは違う？

「島唄」というポップスがヒットして、島唄とは沖縄音楽のことだという誤解が広まったが、本来の島唄は「奄美の音楽」を意味する。

どちらも蛇の皮を張った「三線」を使うので誤解を招きがちだが、実は奄美の音階は「律音階」であり、本州と同じである。一方沖縄は「沖縄音階」という独自の音階を用いるので、メロディが大きく異なる。

16世紀に沖縄経由で蛇皮三線が入ってきたため、楽器としては奄美でも使っているが、音楽的には本州の文化が入ってきている、という点でたいへん興味深い。本当の「島唄」は本州風なのだ。

【第七章】 二度の大戦と日本

〔1〕 北海道開拓の理由と海外進出の原因

前章で述べた通り、全国に 300 藩近くあった藩の藩士を解雇することは暴挙に近い処分であり、当然反発も多くあった。こうした旧士族を手当てするために、北海道を各藩に分割支配させて領地を配分する、という試みが実際になされていたが、廃藩置県に伴いそうした動きは徐々に中断してゆくことになる。

それと引き換えに、北方におけるロシア帝国の脅威が判明するにつれ、民間人をも巻き込んだより大きな北海道開拓の必要に迫られるようになり、北海道開拓史や屯田兵達が募集されるようになっていった。

こうした募集に応じた民間人は、これまでのこの教科書の流れを思い起こせば容易に想像できよう。そうである。本領の土地を相続することができなかった農家の次男や三男などが、自分の領地や開墾地を求めて北海道に渡る決意をすることになったのである。

ちなみに、歴史を通じたわが国の人口推計は以下のように変遷している。

<日本の全人口>

縄文期	10万人
平安期	250万～400万人
戦国期	1500万人
江戸期幕末	3300万人
明治初期	3500万人
大正期	5900万人

こうした推計を考えると、新田開発や技術改良で江戸期に向かって人口が倍増を繰り返し、工業技術も共に発展した大正期に至っては、さらに人口が倍増するという状況が生じていることがわかる。

つまり、日清日露戦争を経て太平洋戦争に向かう背景には、国民が本領とすべき土地が不足しており、それを国内外に求めて諸外国への進出を果たそうとしたその計画が如実に理解できるのである。

太平洋戦争に向かって、日本軍が満州に満州国を建国することになったのも、朝鮮半島を併合したのも、あるいは北海道を越えて樺太に進出したのも、すべては「土地、領地、耕作地」を求めての所業だったと気づくわけである。

〔2〕 満州国の隆盛と崩壊

満州国は、日本の傀儡政権としての意図をもって建国されたことは相違ないが、1932年から1945年まで独立国として各国の承認を受け存在していた。

「五族協和」をスローガンにしており、日本人・漢人・朝鮮人・満州人・蒙古人の五族のみならず、アジアの数多くの民族に開かれた国家であった。興味深いことに、満州国ではそれぞれの持つ本来の国籍を有したまま国内で活動することが出来、南満州鉄道や満映といった開発企業を中心としながら、国土の開発がなされていた。これは、英国が東インド会社を通じてアジア地域のコントロールを行おうとしたことを先例としている。

満州国の人口は、3000万人からのちに4000万人へと増加し、その95%は満州人であり、日本人は5%ほどが軍部・満鉄職員・入植者などと

して活動した。

実際に満州国へ入植したのは10万人ほどだったが、日本政府は500万人の移動入植計画を策定しており、本土における土地不足の解消を意図していたことは明確だと思われる。

1945年、日本の敗戦とともに満州国は崩壊し、侵攻したソビエト連邦の管理下におかれたため、シベリヤ抑留や中国残留孤児などの悲劇を生むことになった。また、米軍が上陸した沖縄では激戦によって多くの人命が失われ土地が焦土となった。

〔3〕 敗戦後の日本と高度成長

日本の敗戦とともに、わが国の統治はGHQの管理下に置かれたが、当時アメリカを中心とした連合国は、ソ連とその周囲で活動を強めていた中国・朝鮮系共産主義勢力に重大な懸念を抱いていた。

そのため、当初は平和憲法を立てることで武装放棄させた日本に対して、朝鮮戦争の勃発とともに警察予備隊を創設させて再び武力を持つことを容認するようになった。

こうしたアメリカの思惑によって、日米安保問題は表裏合わせて数々の課題を有するようになり、現代でも国内で多くの議論を生むことになっている。

また、敗戦とともに沖縄はアメリカの直接統治を受けるようになったが、今度はベトナム戦争の「最前線基地」としての役割を担わされることになり、駐留米軍と復帰を望む人たちとの間にさらなる軋轢を生むことになった。

最終的には、1972年に沖縄は日本に復帰し、「沖縄県」が設置され現在に至る。

さて、経済成長に向かった日本だが、「人件費の安い発展途上国が、徐々に技術を身に付けることで発展を遂げてゆく」というモデルをおなじアジアの中国が再現したことで、欧米やアメリカの推進する資本主義経済の一つのグローバルな側面であったに過ぎないことにも気付かされる。

すでに中国も発展から停滞期に突入し、次の新しい新興国の隆盛が待たれる時期にさしかかっていると見えよう。

ところが、この経済成長は、戦後のベビーブームという人口増加において、これまでのように「土地を中心とする」のではない新しい経済発展の形を実現してみせた。

それが、工業化と都市化であり、これまで土地を相続できず本領を去り困窮する以外に方法がなかった各戸の次男・三男たちが次々に都市に出て工場やサービスの職につけば、高い給与を得られるという「サラリーマンモデル」を生むことになったのである。

高度成長期には「金の卵」と呼ばれた都市労働者をはじめ、現代の正社員ホワイトカラーの成立は、こうした田舎や郡部からの人口移動によってより大きなうねりとなっていったのである。

逆に、農地において作物を作るしかない田舎や郡部の本来の領主たち、つまり長男の家系は、経済的な発展からは取り残されて、地方が疲弊するという状況を生むようになった。

しかし、2050年に日本の人口が9500万人と推計されるように、少子化が進めばわが国は確実に近代や中世の規模に社会が縮小してゆくことも予想され、その頃に地方と都市の関係がどのようになるべきかについても、十分に考えるべき課題となっている。

○ おわりに

あなたは今、都市に住んでいますか？あるいは田舎や郡部といわれる所に住んでいて、地方の生活を送っているかもしれません。

あなたは会社員や企業で勤めていますか？あるいは、公務員や自営業を営んでいるかもしれません。

あなたのお父さんは、どんな生き方をして、どんなところの出身でどんな仕事をしてきたのでしょうか？あるいはあなたのお母さんとどのように出会い、どのように一緒に暮らすことになったのでしょうか。

その、「人が生きる営み」において、「どうして自分がここにいるのだろう、どうして人は生きているのだろう」という疑問を一度くらいは抱いたことがあるでしょう。

その答えが、この教科書を読むことでいくつか見つかったのではないかと著者は思っています。

あなたがどの県に根ざしていて、どの地域に縁があって今生きているのかは、少し前の先祖の動きに大きな理由があります。そしてその先祖がなぜその地にいたのかは、その前の先祖の動きに、大いに関係があるのです。

科学技術と物質文明が発達した現代においては、そうしたことはすでに忘れられているかもしれませんが、たしかにそこには理由があります。そして、その謎を解くヒントの鍵となるのが、あなたの苗字です。

1000年続いたあなたの家系が、これからの1000年後にどうなるか。それは誰にもわかりませんが、きっとそこに繋がる何かが存在していることだけは確かです。

みなさんの益々のご発展を心から祈念して。 著者しるす。

2022年1月2日 作成